

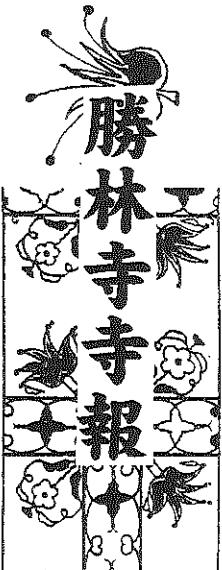
紅元前四世紀ころインドは生まれ仏教を開いたゴータマ・シッタルタ（いわゆるお釈迦さま）だけではなく、当時インドにあったバラモン教などいろいろな哲学・宗教においてその道の真理を悟りめざめた人をみなブッダと呼んだのだそうです。

さて、「仏教」の開祖お釈迦さまは、小さな北インドにあったシャキヤ族（釈迦族）の民族國家「カピラ国」の王子でしたが、若くしてその地位を捨て（出家）、長い苦行を経て最後、ニレンゼン河のほとりの大きな菩提樹の下で瞑想にはいり、明けの明星の輝くとき「法」（ダharma）（真理）を悟ってブッダとなられたと言われています。

まず、「仏教」とは仏のおしえです。「仏」とはブッダ、「仏陀」。「覚者」。さとった人・めざめた人。人生について、また世界について、その真実なありようが見えてきたということです。紀元前インドでは、そのようにものの真実、もののほんとうのありよう、それを「法」と言いますが、その法を覚つた人、その人を「覚者」。その人を示すインドの古語サンスクリットでは「ブッダ」。中国では音写して「仏陀」「浮屠」。また日本では「ほとりけ」「ほとけ」などと言いました。

私は幸いに浄土真宗の寺にうまれ、中学校も大学もその関係学校で学び、大人になつてからも宗門関係機関で仕事をしながら多くの方々から「仏教」を学んで参りました。どのお經も、その書き出しに「如是我聞（ふくわしこれ聞け）または「我聞如是」（われ聞くがま）こと」と記されていて、立派な先生や先輩がた、その他有縁の方々から伝え聞いたおえによつて愚かな私が理解した「仏教」を人生終焉を迎えた今、簡潔にまとめてみたいと思ひます。

# わたしの仏教



その語った真理、それを「仏法」「仏教」と言つうのです。

さてそのおしえを、以前から共に法をもとめて苦行してきた七人の友へ先ず説いて聞かせました。これを「初転法輪」（じょてんぱる）と言います。ここに仏と法と僧（共に歩む人の所謂「三宝」（さんぼう）（教団成立の三条件）がそろつたことになります。ちなみに日本に仏教が渡来したとき聖徳太子が十七条憲法で「篤敬三宝」（篤く三宝を敬え）と仏教を勧めたことは有名です。

さてその釈迦が悟った真理「法」とは。  
なにしろ文字もなにもない時代。最初の頃  
は弟子それぞの伝承（聞き伝え）だったま  
のを、釈迦滅後何十年もたって、弟子たちが  
相い寄つて何回か「結集（けこうしゆ）」といつて  
教えの記憶を互いに照らし合わせました。そ  
うして成立したのが「スッタニパータ」。  
「法句經」など極くわずかな原始經典（ス  
トラ）です。

以後、何回かこの結集がくりかえされ、漸く迦のおしえは「經典（スートラ）として整えられ、その經典の数も次第に増えて行きまた。また「經」や「律」（弟子たちの雑録）についての解釈論議「論」も整つてきました。この

「経」・「律（戒と律）」・「論」。これを  
また「三蔵」といいます。この「三蔵」が成  
立すると、これについての見解・解釈・論議  
も盛んに行われるようになり、この三蔵に精  
通した人を「わゆる「三蔵法師」と呼び、自

道にかゝるいれりの「三藏法師」。實に自然、宗派・学派もうまれ、紀元前後には大小二五・六派にも分れて、互い切磋琢磨しあい仏教は発展して行きました。半面、煩瑣な学問体系にしあがつて行つたのも事実です。まことに已元後にはミシシッピ河谷のゲン

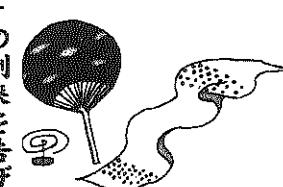
たさらは紀元前後にはまたインド西部の方々がダーラとよばれる五河地方でローマ文化とあつ融合し、仏教は芸術的に造形莊嚴され仏像・仏塔の多く造られて、きました。四世紀ごろ

仏塔も多く造られていました。四世紀になると、にはタントラといわれるインド古来の民間秘密信仰とも融合して「密教真言」の宗がむしろ主流をなすようになりました。

その後、仏教はインド全域に普及し、そのうち主に「大乗仏教」——出家僧侶だけではなく僧俗共にあゆむ仏教——は「北伝仏教」とよばれ、ヒマラヤ西域地方を経て中国・日本へ

永代經法要の

卷之三



一方、「小乘仏教」——主に出家僧侶の仏教は「南伝仏教」と称され、南インド、センローンを経てビルマ、タイ方面へ広がつて行きました。(次号に続く)

七月勝林寺予定

六月十一日 島 内田 宏円様 八十五歳  
(西宗寺前住職様)  
六月二十二日 松枝 古田 広師様 六十四歳

七月八日（火）午後七時半より	七月九日（水）午前一〇時より	七月十日（木）午後七時半より
講師　勝林寺住職　西池匡紹		出石組　同朋講座
*今年は、都合により、二日目の開始時刻を、 変更しております。ご迷惑をおかけします。お 間違えの無いようお願いいたします。		二〇日（日）川崎宅　初盆
*地区役員さんより、永代経懸志の袋を配つて いただきます。よろしくお願ひいたします。		数森正彦宅　初盆
	二二日（月）初田一三宅　三回忌	森戸茂宅　七回忌
	二三日（火）兵庫教区　実践運動委員会	宮島小好宅　初盆
二六日（土）宮嶋重喜宅　初盆	二四日（木）切益	湯口真由美宅　初盆

勝林寺の本堂に、「本格的な夏」の到来を告げる 永代経法要が勤まります。
永代経とは、「永承く、永代にわたり教尊の説 かれた真実の教えである經が、読み続けられ、 聞き続けられることを願つて勤まる法要」です。
皆で、お唱えし、聞かせていただきましょう。
十一日（木） 兵庫教区 組長副組長研修会
十二日（金） 兵庫教区 組長副組長研修会
十二日（土） 永井あさ江宅 一周忌
関森八重子宅 初盆
一三日（日） 山本 宅 七回忌

五日（土）正福寺 永代経  
七日（日）出石組仏堂 報告総会

臨終やからと  
臨ぐ」とはないと

母のお念仏を耳にしながら、所用で妹が枕

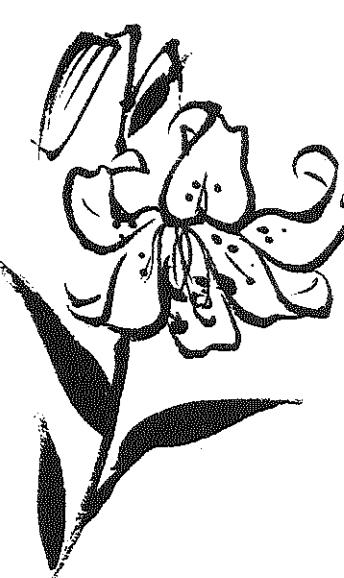
高田俊彦  
(金沢市 76才)

平成八年三月十六日、母やよがリュウマチによる臓器不全のため亡くなつた。行年八十。

親さまの懷にとほしこむ（金沢弁で突き進むの意）、そんな心になる者や。おらは、そうして阿弥陀さまにすっかりまかせてしもつたがや」母の言に従い十四日の深夜に病院を出た。十六日の朝、六時三十九分に往つたとの電話があつた。母のお念仏を耳にしながら、所用で妹が枕辺を離れた間のことであつた。

母の臨終には誰も立ち会つてはいない。

五木寛之編『うらやましい死にかた』より  
(抜粋)



## 本当の相になるこれが 仮の教えの目的である

暁鳥敏

法語カレンダー七月 (HPより抜粋)

どすん

西宗寺の前住職様が往生されました。勝林寺では、長きにわたり、毎年報恩講で法話をお聞かせいた

だいており、「門徒の皆さんは、ご縁に遇えることをいつも楽し

みにしておられました。いつでも

だれにでも、同じ目線で、親しく声をかけてくださいましたので、「学校現場はたいへんでしょう」と、寺と仕事の両立を案じてくださいました。

お参りに来てくださつていった頃は、私は勤めていましたので、「前職が亡くなつて、たくさんの方からおかけくださいました。きっと私のように、先

生のかけでくださる言葉で同じ思いをされた方がいいづばいいいらしたのでしょうか。通夜も葬儀の

日も、本堂も境内もたくさんのお参りの方で埋め尽くされていました。その中で喪主である

住職が、「前職が亡くなつて、たくさんの方から「お世話になりました」と声をかけていただ

きました。改めて(ああ父は多くの方にお世話になつていたのだ)と、気づかせていただきま

した」と挨拶されました。「・・なるほど」世話というのは、する人とされる人がいて、する

人からの一方的な働きかけであるかのように、私は錯覚していました。だから、日常の中で「お

世話になつています」と言われたら、「こちらこそお世話になつています」と応えてはいました

が、時に、それは、表面的な言葉のやり取りになつっていました。しかし、それは、

大きな違いであつたと気づかせていただきました。お世話は、させてくださる方、受け入れて感謝してくださいある方があるからお世話となれるのです。自分がお世話をしているの

ではなく、自分に都合の良い仏法を求めていた、宗教さえも、自分の関心で利用しようとしていた「本当の相」を知らされることに他ならない

ではないでしょうか。それを、親鸞聖人は、「眞実教」と示してくださつてているのでしょうか。

藤原正寿

(金沢教区淨秀寺住職)

### 勝林寺ネット

### 本願寺ネット

#### ご報告

本山では、六月五日をもつて第二四代即如門主様が退任され、六日より第二五代専如様がご門主となられました。親鸞聖人没後七五〇年余、法統は脈々と受け継がれてゆきます。

今年も、たくさんの有縁の方々の読経の声の響く中、一九名の物故者のお骨を大谷本廟に納めさせていただきました。そして、その足で、オリーブと醤油、そして、絶景を誇る小豆島の旅を満喫してまいりました。今年もいい旅でした。

お知らせです。九月六日、勝林寺の本堂で管弦樂のコンサートが催されます。もしかしたら、指揮者である佐渡裕さんもお見えになるかも

予告編

お前、まだ来たか。もう来るなと言うて置いたがに。おらの年とった妹たちも来たし、お前ら子供も、また来てくれた。何度も危篤や、それ臨終やと、県境を越えて氷見の病院まで駆けつけてくれて、生きている者の方が、おらより大変やなあ」

「前から話して置いた通り、臨終やからと騒ぐことはないぞ。平生業成(へいせいじょうしゆう)やぞ。お文(ふみ)(こ文章)にもあるやろ、おらは、もうお念仏のお陰で正定聚(じょうじょうしゆう)(ほきよしゆう)や。だからして、臨終(死に至る)に良い悪いもしない。ひとの臨終(死ぬとする)をとやかく言うもんでないぞ。おらの臨終は阿弥陀様にまかせたがや。さあ、早よう家へ帰つて、休んでくれ。運転には気をつけてな」「なむあみだぶ、なむあみだぶ」。母はこう言ひ終えると念仏を唱えながら目をとじた。春の入り日が窓に映えているせいか、顔色がよい。つぶやく念仏の声には、まだ張がある。香睡というより熟睡に見える。――

「俊一、お前、まだおつただか。あ、この前、会いたい者がおつたら呼ぼうか」というてくれたが、それはいらぬぞ。会う縁にある者にはもう会うた。俱会一処(ききじょく)(同じ阿弥陀さまの世界にみんなが出会いえる)というぞ。会う縁にある者にはまだ会える。ほんとうに誰も呼ばないでくれ。どうでもよいがやが葬式のことや。葬式は供養ではないぞ。それは婆娘の習いやから、見送を張らんでな。つましいがにな」

「これは大事なことやが、お念仏や。お念佛は人それそれが戴くもの。無理せんでいい。お前もご縁いただいているのやからな。お念佛がひとりでに湧いてきて、それに押されて